

# 松波むかし語り

ここに生き続けて

その25

食料品店「松波食品」を経営していた

今回のお客様

中村 勇さん 83歳 3丁目

“年中無休の商売は、苦しかったけれど充実した毎日でしたね！”

—いまも暮らしを工夫する中村さん、人生のいつの時も生活を楽しんで見えるのはうらやましい限りです。



中村さんはさまざまな植物を育て、そして朝4時に起きて千葉公園の綿打池の周りを7～8周回ってくる、また「60を過ぎて酒をやめ、百人一首を覚え俳句を始めました」という、年とってから人生を充実させるお手本のような方でした。



「松波食品」といえば、古い人は「ああ、あそこのお店ね」と気がついてもらえるでしょうか。最盛期、若い人を3人使って乾物を中心に食料品を商っていた松波食品は、毎日が売り出しのスーパーのようなにぎわいでしたが、いまは3丁目の床屋さんの隣の藤棚のある家と言った方がわかりやすいかも知れませんね。

中村さんは成東の生まれ、9人兄弟の中で育ち、昭和25年、23歳の時、松波にやってきました。当時まだこのあたりには北島ふとん店と藤木工務店、そして千葉商くらいしかない時分。食料品店を開店させたのですが、「当時の松波は分譲地と言ったって松林の中、とても商売なんかできる場所じゃありませんでした」。そこで現在の県営住宅から作草部の県営住宅、汐見丘あたりまで自転車でご用聞きに歩き、取った注文を配達しました。ガスはもちろん、最初は水道もないところで、「弟と手伝いの者で井戸を掘ったら、6メートルで出ました」という経験も……。



昭和25年開店の松波食品

乾物を中心にみそ、醤油などなんでもある松波食品、

「カゴ一つ下げて朝4時19分の一番電車に乗って築地まで行き、カゴと両手に荷を二つづら下げて帰って、それで商売になった」と言いますが年中無休、夜は9時頃まで店を開け年末は夜通し商売をしたそうです。「苦しかったけれど充実してた」と中村さん。やがて自転車は自動二輪に、軽三輪から普通車になるとともに、松波も街らしくなっていました。そしてご用聞きは大きな成果を生みます。それがきっかけで、作草部の県営住宅におられた奥様と結婚したことです。

シャモを飼ったり藤棚を結ってみたり、中村さんはその時々、人生を楽しんできたように見えます。いまは千葉公園の散歩をかかさず、「1周10分で池を回ったりカンカウを拾ったりすると、ずいぶんいろいろな人が毎朝同じ時間に歩いているものです」。千葉公園で顔見知りを増やしたり、行く先々で人生を充実させているように見える中村さんでした。



町を彩るご自慢の藤